



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	親鸞『浄土和讃』の研究
Author(s)	ポルカラ, ユリアナ
Citation	北大宗教学年報, 5・6合併号, 32-43
Issue Date	2025-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95890
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_6_04_p32-43.pdf



親鸞『浄土和讃』の研究

ポルカラ・ユリアナ

はじめに

仏教学・日本仏教の各宗派に関する研究においては、「教化」および「讃嘆」の範疇に含まれるものが研究対象とされることが多い¹。その中で、和語讃嘆つまり和讃という独特のカテゴリーを持つ仏教的かつ文学的作品が、仏教において極めて重要な位置を占めていると考えられている²。日本文学史、日本思想史、日本宗教史の三つの研究分野を強く結びつけるものとしての「和語讃嘆」は長い歴史をもつ日本の声明曲の一種である。和語讃嘆は、宗教的な側面および文学的な側面をもっているため³、和讃の研究は国語学、国文学や仏教学のような様々な分野において、極めて重要な研究対象と位置付けることが可能である。また、史料として多く扱われてきたものである⁴。最も有名である和讃集の一つは、鎌倉時代を生きた親鸞著書の『三帖和讃』であるといえる。

研究の目的

本論文は『三帖和讃』を親鸞の布教方法の一つとして扱いつつ、とりわけ『浄土和讃』およびその一部である『現世利益和讃』の役割の再検討を目的とする。『現世利益和讃』の内容は『浄土和讃』と多少異なり、『浄土三部経』の内容を簡単にまとめたものではなく、専修念仏を実践することによって現世において得られる利益を説いている和讃になっている⁵。ただし、先行研究の浄土真宗の宗門系大学の立場からすれば、「現世利益」とは、念仏を称えて求めるべきものではなく⁶、あくまでも比喩的な内容として、浄土門讃嘆の中に組み込まれた利益のことを指している⁷。こうした宗門系大学の立場も含めて先行研究をまとめた上で、本論文は『浄土和讃』の文脈を考慮しつつ、『浄土和讃』の中に含まれる『現世利益和讃』を分析し、和讃という特殊な形式および親鸞による「左訓」という加筆・指示に

¹ 安楽昭壽 (1974)、61-68 頁。

² 多屋頼俊 (1992b)、30-34 頁。

³ 多屋頼俊 (1992a)、23-25 頁。

⁴ 安楽昭壽 (1974)、61-64 頁。

⁵ 一楽真 (2010)、146-147 頁。

⁶ 葛野洋明 (1996)、167-168 頁。

⁷ 同上、167-168 頁。

焦点を当てて、『現世利益和讃』役割を再検討し、民衆を中心とした解釈の可能性について論じることを目的とする。

和讃の歴史と展開

和讃の歴史は奈良時代(710 年-794 年)に遡るとされているが⁸、とりわけ鎌倉時代(12世紀末 -1333 年)に和讃が布教方法として流行し、数多くの和讃が作られた⁹。日本で最古の和讃とされるのはその原型である「讃歎」つまり「仏教讃歎」あるいは「讃談」とも呼ばれるものとされており¹⁰、その曲調は「梵讃」「漢讃」に準じている。平安時代中期頃には和讃は成立・定着するとみなされており¹¹、この時代の作品が「古和讃」と呼ばれている¹²。ただし、平安時代(794 年-1185 年)までの和讃は当時の日本社会のごく一部からなるエリート層によってしか作られず¹³、奉讃供養等のような仏教関連の儀式を行う僧侶が和讃文化の中心であったと言える¹⁴。つまり、鎌倉時代になってから和讃が盛んに作られ、「教化」の一つとなった。

親鸞と和讃

親鸞は多くの和讃などを作った、浄土真宗の開祖とされる僧侶である。親鸞の生涯をおおまかに説明すると、次のとおりである。九歳の頃、親鸞は出家し、比叡山で修行をはじめた。二十代に入って、東山の吉水の地で専修念仏の教えを説いていた法然(源空)に出会い¹⁵、健仁元年(1201 年)に法然の弟子となる。また、同じ年に恵信尼という女性と結婚した。健永二年(1207 年)に比叡山から専修念仏の教えが誤っているとみなされ、「仏敵」と呼ばれるなどして法然とその弟子達と共に迫害を受けた¹⁶。その結果、法然とその教団は京都から追放され、親鸞も 35 歳から 42 歳の間流罪となり、京都から離れて、越後で暮らしはじめたという¹⁷。ただし、罪が許された後、親鸞は各地を周り、自らの師としていた法然と

⁸ 浄土真宗本願寺派 (1997)、92-93 頁。

⁹ 多屋頼俊 (1992a)、39-40 頁。

¹⁰ 安楽昭壽 (1974)、66 頁。

¹¹ 同上、74 頁。

¹² 同上、75 頁。

¹³ 安楽昭壽 (1974)、67-68 頁。

¹⁴ 同上、67-68 頁。

¹⁵ 同上、43 頁。

¹⁶ 藤場俊基 (2007)、11-13 頁。

¹⁷ 名畑崇 (2010)、16-23 頁。

離れても念仏の教えを関東において広く門弟に布教し続けた¹⁸。晩年に親鸞は再び京都に帰り、著作活動に取り組み、浄土真宗の根本聖典である『教行信証』を元仁元年(1224年)に執筆したが¹⁹、他にも和讃等、多くの作品を作った。親鸞は九十歳で亡くなり²⁰、最期まで自らを法然の弟子と考えていたとされている²¹。

『三帖和讃』と『浄土和讃』について

念仏思想を広めるために、親鸞は『三帖和讃』と呼ばれる和讃集を作り、そうした和讃を漢文が読めない民衆に対する布教法の一つとして用いたと考えられている²²。この『三帖和讃』は『浄土和讃』『高僧和讃』と『正像末和讃』の三つの作品からなる。それらは浄土門、つまり阿弥陀仏の救済の本願などを讃嘆したもので²³、親鸞はその内容を「やわらげほめ」と呼んでいる²⁴。『三帖和讃』はいうまでもなく日本文学史・宗教史(仏教史)の分野において重要な位置を占めており、浄土宗・浄土真宗のような鎌倉時代に誕生した新たな仏教宗派と民衆との関わり、また、その背景にある仏教思想の展開を反映しているため、多くの先行研究において論じられてきた²⁵。

『浄土和讃』と『現世利益和讃』について

『教行信証』を執筆した後、76歳の時に、親鸞は多くの和讃を作り、最初に完成したのは『浄土和讃』とされている²⁶。1248年創作とされる『浄土和讃』の内容は浄土宗・浄土真宗の重要經典である「浄土三部経」、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』に依っている²⁷。そして以上に加え、「正信偈」の内容が更に展開していったのが『浄土和讃』と『高僧和讃』の形成に繋がっていると考えられている。つまり、『浄土和讃』はこうした浄土宗・浄土經典の基本教理を伝えるためのものであると理解していいであろう。

¹⁸ 同上、18-20頁。

¹⁹ 藤場俊基(2007)、21-29頁。

²⁰ 真継伸彦(1975)、54-56頁。

²¹ 同上、54-56頁。

²² 高木豊(1980)、6-12頁。

²³ 一楽真(2010)、126頁。

²⁴ 同上、126-127頁。

²⁵ 研究が数多くなされてきたが、金子大栄、葛野洋明、稲葉圓成、佐々木大悟、安楽昭壽による研究を参照せよ。

²⁶ 浄土真宗本願寺派(1997)、92頁。

²⁷ 一楽真(2010)、143-144頁。

『現世利益和讃』は『浄土和讃』の中に含まれるものであり、十五首で構成されている。正式に『現世利益和讃』は『諸経讃』と『勢至讃』と共に諸経による和讃であると分類され、『諸経讃』の立題に「諸経の意によりて弥陀和讃」諸経意弥陀仏和讃等とある²⁸。『現世利益和讃』において出現する神々や諸仏が内容の中心となっており、その神々の利益（恵）を念仏者が得られると説かれている（「現世」とは今の人生を意味し、「利益」はメリット、恵を意味している）。

神々や諸仏の利益は、例えば、念仏を称える者の罪を軽くする利益「三世の重障みなながら かならず転じて軽微なり」や、自然災害や諸々の災いから護る利益「七難消滅の誦文には 南無阿弥陀仏をとなくべし」などを含む。すなわち、『現世利益和讃』は、「現世に得られる利益」を内容としており、念仏を称える者が得られるあらゆる利益が讃嘆されている。

次に、現世の利益とはいかなるものか、それらをどのように分類できるか、例を挙げて説明する。

現世利益の具体的内容は下記の5つである²⁹：

- ①息災延命 一首目
- ②七難消滅 二首目
- ③重障軽微 三首目
- ④滅罪 三首目以降
- ⑤護念 三首目以降

以上の5つを簡単にまとめると、やはり罪が減することと、災いから念仏者を護ることが大きなテーマになっていると分かるであろう。災いから念仏者を護ることによって、念仏者の寿命が延びる。また、念仏を称えれば、輪廻転生を繰り返すことによって重なってきた煩惱と罪が軽くなり、地獄へと落ちることがない、という大きな利益が得られる。

先行研究の紹介

葛野洋明は「現世利益の研究」『印度学仏教学研究』（1996年）で一首目である息災延命と二首目である七難消滅を現世利益の説明として捉え、三首目以降のものを『信文類』における「現生十益」の転悪成善益、冥衆護持益と諸仏護念益と対応しているものとして認める³⁰。彼は、説かれている現世利益を親鸞自身による意図的な利益として捉えてはいけな

²⁸ 葛野洋明 (1996)、167-168 頁。

²⁹ 同上、168 頁。

³⁰ 同上、167 頁。

と指摘しており、そしてその理由は、『現世利益和讃』に説かれている様々な利益は諸經典に基づいており、様々な神々や諸仏もその經典をもとに和讃で出現しているためである。従って、葛野は、親鸞は念仏を称えて必ず得られる現益を意図的に和讃の形式で布教していないと主張している。

金子大栄は念仏の利益と教義上の矛盾を意識しているが、念仏に伴う利益は決して呪文のような私利私欲の利益ではないと主張している³¹。金子は「一方では現世利益を求むべきではないと説きながら、他方では、現世利益和讃までも説かれてある。それはちょっと矛盾のようではありますが、決してそうではないということを我々はこの十五首の和讃によって知ることができるであろう」と述べている³²。そして、七難消滅と息災延命は現世利益のあり方であり、これもまた個人が得られる利益ではなく、国土人民全体が得られる利益を意味している³³。また、金子は公的な利益は念仏者だけの利益ではなく、国土人民みんなの利益ではあるが、『現世利益和讃』の第十二首目からの四首は特に真宗の念仏の信者にかぎったものであると指摘しており、これらの四首は信心という念仏者の心構えを表している。金子は、すなわち、親鸞は念仏を称えて、利益が得られるということを信じていないと主張している。

まとめていえば、一方では、『浄土和讃』の所説は浄土真宗の主要經典である『浄土三部經』に依って説かれているが、他方では『現世利益和讃』は顕密仏教において重要視されてきた經典である『金光明經』に依っている。『現世利益和讃』の冒頭には『金光明經』が出現するため、「密教的」要素の可能性があると考えられる。

『現世利益和讃』と『金光明經』

『金光明經』は日本仏教史において、聖徳太子の時代から鎮護国家思想と密接に結びついており、鎌倉新仏教の各宗派の誕生にも極めて強い影響を与えた經典の一つとみなされている³⁴。梵名を『Suvarṇabhasasūtra』(黄金の光りの經典)或いは『Suvarṇaprabhasottamasūtra』(黄金の最高の輝きの經典)といい、古来ネパールでも九法宝典の一として重要視されてきた³⁵。広くアジア全域に普及していた³⁶内容とは、『金光明經』は国家の権力者が正しい仏法・戒律を守れば、四つの神々である四天王が化身して災難から権力者とその国家を護ると

³¹ 金子大栄 (1988b)、98 頁。

³² 同上、98 頁。

³³ 同上、107-108 頁。

³⁴ 藤谷厚生 (2005)、1 頁。

³⁵ 同上、1-3 頁。

³⁶ 同上、1-3 頁。

いうものである。加えて、もし『金光明経』を奉祀すれば、様々な利益をもたらす等、あらゆる国家・権力者へのメリットのことが語られている³⁷。これは、鎮護国家思想という³⁸。すなわち、金光明経は、日本仏教伝来以来、もっとも重要視されてきた経典の一つである。

『現世利益和讃』の冒頭には「一首 阿弥陀如来来化して 息災延命のためにとて 金光明の寿量品 ときおきたまえるみのりなり」とある³⁹。『金光明経』の所説が『現世利益和讃』の中の①息災延命を表す一首目と②七難消滅の二首目に対応していることに間違いはない。これは、どのように理解していいのであろうか。親鸞の和讃において鎮護国家・国家護持の思想を代表している経典が拠り所となっている理由は三つ考えられる。

①『現世利益和讃』が親鸞の鎮護国家観を表しているからという解釈であり、これは念仏を朝家のために称え、また、国民の平和のために称えることを認めるためである⁴⁰。

②奈良や比叡山から受けた批判を意識して、念仏信仰を正当化する試みとして『現世利益和讃』が作られたからである⁴¹。

③単に仏法を広めるための和讃で、自然災害や感染症で苦しんでいた民衆に息災延命と難消滅の利益を念仏につないで説くと、念仏者が増えることを目的としたためである⁴²。しかし、真相は未だ明らかになっておらず、様々な憶測が飛び交っている。

巻頭の左訓を根拠として『現世利益和讃』の役割について論じている**稲葉圓成**は、「現世利益和讃と金光明経－親鸞聖人の鎮護国家観」で『金光明経』の新たな解釈を提唱したものとして作られた『現世利益和讃』について述べている⁴³。『現世利益和讃』の巻頭には「阿弥陀如来来化して」とあり、その左訓には「キタリテアワレミタマフ」とある⁴⁴。続いて、「息災延命のためにとて 『金光明』の「寿量品」ときおきたまへるみのりなり」とあり、この左訓には「四クワンノキヤウナリ コレヲサイショウワウキヤウトイフ十卷也」と記されている⁴⁵。

³⁷ Hall Yiengpruksawan Mimi (1998), 22-24.

³⁸ 静慈円 (1996)、111-115 頁。

³⁹ 教学伝道研究センター編(2011)、387-388 頁。

⁴⁰ 葛野洋明 (1996)、168 頁。

⁴¹ 同上、167 頁。

⁴² 同上、167-168 頁。

⁴³ 稲葉圓成 (1922a)、33 頁。

⁴⁴ 教学伝道研究センター編(2011)、387-388 頁。

⁴⁵ 同上、387-388 頁。

稲葉は阿弥陀仏が人類の貧しい姿を見て、息災延命と現世利益を祝福するために恵まれたのが『金光明經』であると述べている。国家と『金光明經』について「この經によって仏の限らない恵を頂戴し、随喜すべきであって、この仏心を外にして国家の繁栄を祈り個人の福楽を禱るのは、金光明經の本意ではない」と語っている⁴⁶。すなわち、『金光明經』の内容に焦点を置き、『現世利益和讃』を考察してきた稲葉は、親鸞は新たな鎮護国家解釈を提唱した結果、『現世利益和讃』を作ったと述べている。また、金子は公的利益をもたらす念仏に注目し、『金光明經』における国家の安穩のために念仏を称えても結構であると捉えている。しかし、『現世利益和讃』が説く念仏は利益を得るためのものではない⁴⁷。

本論文の見解

ここで、問題点を一つ挙げる。『現世利益和讃』には多くの仏・菩薩や神々が出現する。法然と親鸞の思想は「多仏繫属」ではなく、「一仏繫属」⁴⁸であり、彼らの専修念仏は一つだけの仏に帰依し菩薩道に入ることを前提としているにもかかわらず、なぜこれほど多くの神々や仏・菩薩が『現世利益和讃』に出現するのであろうか。「一仏繫属」と特に専修念仏は、多数の仏ではなく、阿弥陀仏だけに帰依し、念仏を信心からなる感謝の気持ちで称える考え方を意味している⁴⁹。この「一仏繫属」は欧米の研究者からは *exclusive teachings*、つまり、排他的教えとも呼ばれてきた⁵⁰。多数の仏に帰依しないのは法然と親鸞が代表している鎌倉新仏教の特徴であり、様々な修行方法の中から一つだけの仏に帰依し、簡素化した教理を布教するということはいわば「旧仏教」とも呼ばれた密教・天台との大きな相違点の一つである⁵¹。ならば、なぜ、親鸞は『現世利益和讃』において多くの神々や他の仏を取り上げるのであろうか、疑問である。そして、それらの神々は、『現世利益和讃』においてどのような役割を果たしているのであろうか。

まず、本論文の主張を取り上げる前に、現世利益和讃の背景について述べる。この和讃の形成の背景に

①親鸞が生きた鎌倉時代の仏教の転換点（末法思想・世間的变化）があった

⁴⁶ 稲葉圓成 (1922b)、2 頁。

⁴⁷ 稲葉圓成 (1922b)、2 頁。

⁴⁸ 河智義邦 (2020)、3 頁。

⁴⁹ 同上、3-5 頁。

⁵⁰ Foard H. James と Ingram, O. Paul は *exclusive faith, exclusivist* という表現を用いる。詳しくは Foard H. James (1980) Ingram, O. Paul (1987)を参照。

⁵¹ 平雅行 (2021)、9 頁。

②専修念仏弾圧が布教に影響を与えた

という二つのことを取り上げたい。

まず、末法思想と世間的变化のため、比叡山のような天台宗の寺院において、多数の経、マントラや複数の修行法などに焦点をおかず、最終的目標である悟りを開くためには一つだけの仏への帰依が必要としていたのは親鸞や法然である。様々な修行方法や教えが平等に悟りに至るという考え方が背景にあったが、比叡山の寺院において、小規模の専修念仏派や法華経派等が見られていた⁵²。要するに、こうした専修念仏派だけでなく、他の鎌倉新宗派も明確に一つだけの教えを強調し、他の教理を完全に否定する立場がほぼラディカル派として扱われた⁵³。

次に、寺院側から受けた弾圧と念仏禁止は、親鸞の布教方法、および布教対象に大きな影響を与えたと考えられる。親鸞と法然の教団はマイノリティーではあったが、「一仏繫属」の教えは弾圧すべきものであると国家および寺院側からみなされ⁵⁴、法然と親鸞の教団に対する異端視は、「承元の法難」と『興福寺奏状』に至ったと言える⁵⁵。親鸞は一つの場所にとどまらず、関東を回りつつ、専修念仏の教えを武士、農民、漁師、商人等、あらゆる社会階級の人々を対象として布教したのである⁵⁶。ここで重要なのは、関東教団が多様な門弟から構成されていたということである。様々な社会的地位から構成される教団から親鸞の教理に関する問いが多く、流罪が許されて帰京した親鸞のもとを直接たずねる門弟もいれば、手紙のやりとりを通じて質問に答える門弟もいた⁵⁷。親鸞の執筆作業による布教が本格化したのは帰京後であり、『教行信証』も『三帖和讃』も晩年になってから完成させたのである⁵⁸。『教行信証』は漢文形式の書籍であり、おそらく僧侶など一定の知識を持つ人々を対象としたと考えられる⁵⁹。他方、『三帖和讃』は非常に分かりやすい内容のものであるため、和讃は僧侶以外の一般の人々を対象としたのではないかと言える。

⁵² Suhara Eiji (2015), 444-447.

⁵³ 同上、444-443.

⁵⁴ 国家が弾圧を寺院に要請し、寺院が実行したという仕組みについては以下に詳しい。平雅行 (2021)、119-123 頁。

⁵⁵ 河智義邦 (2020)、3-5 頁。

⁵⁶ 小山聡子 (2017)、74 頁。

⁵⁷ 同上、80-81 頁。

⁵⁸ 同上、80 頁。

⁵⁹ 一楽真 (2010)、52 頁。

左訓について

特に『現世利益和讃』で注目したいのは、やはり付されている読み仮名と「左訓」である。なお、左訓は親鸞の和文著作にしか付されていないわけではない。『教行信証』の坂東本にも左訓が付されているので⁶⁰、和文著作・和讃だけでなく、左訓が親鸞の漢文著作においても見られるということに注意を払わなければならない。漢文が読める人と読めない人を考えると、やはり僧侶のような知識をもっていない人からすれば、『教行信証』はきわめて理解し難いと言える⁶¹。もし漢文形式の『教行信証』は知識の高い人を対象として作られたとすれば、親鸞はなぜ漢文著作まで左訓を付したのであろうか。この点についてより詳しい分析が必要であり、これは左訓の研究の課題の一つでもあるので、本論文では『教行信証』の左訓を扱わないことにする。

では、左訓はなぜ付されているのであろうか。もちろん、内容を更に分かりやすくするためだったことは間違いないが、なぜ「尊敬す」や「天神地祇」等を更に分かりやすく説明する必要があったのであろうか。それは、親鸞が教えを聞く仲間、つまり、善知識という地域の門弟のリーダーおよびその場所となる道場のネットワークを対象にしたからなのではないかと筆者は考えている。もし文字を読めない民衆だけを対象にしたとすれば、なぜ親鸞が帰京後多くの著作の執筆に取り組んだのか、疑問に思われるかもしれない。帰京した時点で親鸞には既に関東にも門弟がいたということは確かである⁶²。また、親鸞と門弟との文通のやりとりもあったので、関東の教団は決して親鸞の帰京後、親鸞に捨てられたような状態ではなかった。したがって、親鸞と連絡を取り続けたのは、おそらく善知識と道場の門弟である。

親鸞は『消息』において善知識についてたくさん書いている。例えば、「善知識ををろかにおもひ、師をそしる」「師をそしり、善知識ををろしめ、同行をもあなづりなんどし」「師のためにも善知識のためにも、とがとなせ」「師のために善知識のために、あしきことを沙汰し」で分かるように、善知識をおろかにする人々と付き合うことを止めようとまで勧めているため、善知識は師と同様に不可欠な存在だったと分かる⁶³。

⁶⁰ 田代俊孝(2020)、8頁。

⁶¹ 藤場俊基(2007)、12頁。

⁶² これは、以上先述したように、『消息』で分かる。宮地廓慧(1968)、253-254を参照。

⁶³ 宮地廓慧(1968)、253-254頁。

結論

本研究は、仏教基礎知識およびその中に位置付けられる念仏のメリットを民衆に説法するために『三帖和讃』が作られたという仮説を提唱するものである。『浄土和讃』の内容は諸経の所節に依るものであるため⁶⁴、その中に収められている『現世利益和讃』は、仏教經典における念仏の役割を明らかにするために作られたと考えられる。また、左訓の分析でも分かるように、内容の分かりやすさに工夫があったと言える。『現世利益和讃』に出現する神々・諸仏が常に護ることなど、今生で得られる様々な利益は、戦乱や自然災害の被害を受けた民衆にとって非常に受け入れやすい念仏布教であったため、この内容になった。利益を求めていいのかどうかに関しては、念仏には現世において得られる利益があるということを実感するように思わせても問題ないように、親鸞は『現世利益和讃』を作った可能性もある。なぜなら、僧侶以外の対象となった人々は、現実的な利益を求めても、それはその理解度でいいとして、庶民は念仏を称えるようになることが最終的な目的だったのではないかと推測できる。最後に、善知識と門弟のネットワークを使って、布教活動を行ったのではないかと考えられるが、本研究において、最新の善知識と門弟に関する研究を更に深掘りする必要があると筆者は考える。

⁶⁴ 葛野洋明 (1996)、167 頁。

引用・参考文献

《一次資料》

教学伝道研究センター編 (2011) 『浄土真宗聖典全書 (二) 宗祖篇 上』 本願寺出版社

浄土真宗本願寺派 (1997) 『英訳親鸞聖人著作集』 本願寺出版社

《二次資料 (和文)》

安楽昭壽 (1974) 『和讃の研究』 高野山出版社

稲葉圓成(1922a) 「現世利益和讃と金光明教一親鸞聖人の鎮護国家観一」 『佛教研究』 第 3 卷第 1 号 1-30 頁

一一(1922b) 「鎮護国家思想の変遷と伝教大師」 『佛教研究』 第 3 卷第 1 号 280-294 頁

一楽真 (2010) 『親鸞の教化 和語聖教の世界』 (シリーズ親鸞第五卷) 筑摩書房

金子大栄(1988a) 「阿弥陀仏とその浄土一和讃の諸問題一」 (講義 和讃の諸問題、1970 年 5 月 11 日)、 『親鸞教学』 52 号 73-89 頁

葛野洋明(1996) 「現世利益和讃の研究」 『印度学佛教学研究』 第 45 卷第 1 号 166-168

河智義邦 (2020) 「専修念仏思想と『興福寺奏状』一親鸞の立場から一」 『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』 20 号 3-11 頁

小山聡子(2017) 『浄土真宗とは何か』 中央公論新社

静慈円 (1996) 「弘法大師空海と護国三部経」 『日本仏教学会年報』 第 61 巻、111 - 128

真継伸彦 (1975) 『親鸞』 朝日新聞社

平雅行 (2021) 『歴史の中に見る親鸞』 法蔵館文庫 (2011 年初刊本の文庫版)

高木豊 (1980) 『親鸞 鎌倉仏教の形成と展開』 平凡社

田代俊孝 (2022) 『親鸞 左訓・字訓・語訓辞典』 法蔵館

多屋頼俊(1992a) 『和讃史概説』 (多屋頼俊著作集第 1 巻)法蔵館

一一(1992b) 『和讃の研究』 (多屋頼俊著作集第 2 巻)法蔵館

名畑崇 (2010) 『歴史の中の親鸞 真実のおしえを問う』 (シリーズ親鸞第一巻) 筑摩書房

藤場俊基 (2007) 『親鸞の仏教と宗教弾圧一なぜ親鸞は『教行信証』を著したのか』 明石書店

藤谷厚生 (2005) 「金光明経の教学史的展開について」 『四天王寺国際仏教大学紀要』 第 4 号 1-28 頁

宮地廓慧 (1968) 『親鸞伝の研究』 百華苑

《二次資料 (欧文)》

- Foard H. James (1980) In Search of a Lost Reformation: A Reconsideration of Kamakura Buddhism. *Japanese Journal of Religious Studies* 7/4 261-291
- Hall Yiengpruksawan Mimi (1998) *Hiraizumi: Buddhist Art and Regional Politics in Twelfth-century Japan*, Harvard University Asia Center
- Ingram, O. Paul (1968) Honen's and Shinran's Justification For Their Doctrine of Salvation By Faith Through "Other Power." *Contemporary Religions in Japan*, Vol 9, no 3. 233-251
- Suhara Eiji (2015) Can Bodaishin Be a Cause of Rebirth? Reconsidering The Doctrinal Conflict Between Honen and Myoe. *Philosophy East and West*, Vol. 65 444-465